

**2019 年度**

**あいち多文化共生作文  
コンクール入賞作品集**



【優秀賞（小学生の部）】

豊橋市立岩田小学校	六年	松村 あゆみ	一頁
「言葉が通じなくても」	．．．	．．．	．．．

【優秀賞（中学生の部）】

滝中学校	二年	豊田 菱介	三頁
「ツールとしての言葉と共生」	．．．	．．．	．．．

【佳作】

豊橋市立鷹丘小学校	六年	中野 拓音	五頁
「違いを知ること」	．．．	．．．	．．．

名古屋市立伊勢山中学校	三年	宮脇 一真	七頁
「ダイバーシティな愛知へ」	．．．	．．．	．．．

大府市立大府北中学校	一年	籠島 佑菜	九頁
「外国人と日本人の違いから見る多文化共生」	．．．	．．．	．．．

岡崎市立葵中学校	三年	則包 真優	十一頁
「自分なりに大丈夫」	．．．	．．．	．．．

豊橋市立南部中学校	一年	足立 純也	十三頁
「多文化共生は「リスペクト」することから」	．．．	．．．	．．．

「言葉が通じなくても」

私の通う学校には外国人の友達が大勢います。転入や転出も多いです。新年度が始まって間もなく、私の通学班にも三人の外国人の子が入りました。その中の一年生の女の子との交流で、強く感じたことがあります。

まだ三人が私達の通学班で登校するようになってすぐに、そのうちの一人が転校することになりました。その子は、一年生の女の子と仲がよく、登校する時もとりにならんで歩いていた五年生の女の子でした。

その子が転校してからしばらくは、一年生の女の子は毎朝泣いていました。そこで私は、女の子のとなりで手をつないで学校に行くことにしました。しばらく歩いているうちに女の子は泣きやんでいました。でもまだ女の子はさみしそうでした。私は手をつないだまま、

「大丈夫だよ。」と声をかけました。学校に着いたら、一年生の教室までいっしょに行きました。

これを何日か続けていたら、「大丈夫だよ。」と言ったときに、安心したような笑顔を見せてくれるようになりました。日本に来てどれくらいなのかは分かりませんが、まだ日本語の意味は理解できていなかったと思います。それでもその笑顔は、私が声をかけたことで安心して見せてくれたように感じました。

私の班は今年度から十人以上というとても大人数になりました。大勢の子達をまとめることに加え、言葉が通じない子もいて、班長の役目を果たせるのか、必要なことをきちんと伝えられるのかなど、最初は不安でした。でもこのとき、言葉が通じなくても相手を思いやる気持ちには伝わるんだと、強く感じました。そう考えたら、言葉の意味が伝わらなくても何とかなると思えてきて、不安がなくなりました。そして、女の子が安心して登校できるようにがんばろうと思いました。

言葉だけで言いたいことを伝えられる日本人の友達との会話よりも、言葉では伝わらない外国人の友達との会話の方が、自分の気持ちを伝えるのが難しいです。これまで私は、伝えられないことや、会話が大変なことは仕方のないことだと思ってしまっていました。でも、本当に相手のことを思いやるやさしい気持ちがあれば、話している言葉の意味が分からなくても、思いは伝わるのです。

私はこの出来事を通して、言葉よりも相手を思う気持ちが自分の中にあ

るかどうかが一番大切だと思いました。そしてそれは外国人の友達との会話だけでなく、日本人の友達との会話でも同じように大切だと考えました。だからこれからは、外国人の友達にも、日本人の友達にも、相手への思いやりを持って過ごしたいです。この考えを少しずつでも行動に移し、これからは女の子と班のみんなのためにがんばっていきます。

「ツールとしての言葉と共生」

僕の住んでいる地域は多国籍だ。ペルー、ベトナム、フィリピン、中国、ロシア、韓国・・・もちろん日本人が一番多いのだが、この作文を書いている今日まさに、空き家だった数軒隣にベトナム人の大家族が引越してきた。またにぎやかにそうさ。

僕が五年生の頃、ペルー人の一年生が同じ通学分団にやってきた。彼女は日本語が全く分からないらしい。来て数日は、少しでも日本語の分かるお母さんらしき人が付き添っていたので、僕たち分団メンバーも安心していった。しかし、その後だ。お母さんらしき人が付き添わなくなってきたから、どう彼女と接して良いのか分団メンバー全員が困っていた。そんな困りが、彼女にも伝わるのか、彼女も集合時間になるとササッと来る以外一言もしゃべらず、挨拶もしない。そして僕が一番気になっていったこと、それは彼女の耳に光るピアスだ。ランドセルを背負い、一年生帽子をかぶってはいるが、耳に数個ピアスを付けている。僕は分団長だったので、そのことに触れるべきかどうかとても悩んでいた。どうして先生は注意しないんだろう。体育でピアスの金具が友人に触れて怪我でもさせてしまったらどうするんだろう。まして彼女自身も怪我するかも。校則では、アクセサリー禁止のはずだし。僕は何日も考えていた。

そんなある日、同じ通学分団の三年生、ゆうさくが突然言い出した。

「あのさ、その耳のやつ、外したら？そういうの付けたらいけないんだぜ。」ゆうさくも僕と同じことを考えていたようだ。

すると低学年の分団仲間が畳みかけるように

「そうだよ、いけないんだよ。」

「はずせよ。」

と言い出した。今まで一度も口を聞いたことのない彼女に対して、初めて話しかけた言葉が彼女を非難するような言葉になってしまった。彼女は言われていることはわからなかっただろうが、雰囲気で自分のピアスについて責められていると感じ取ったのだろう。すごい勢いで泣き出してしまった。僕も彼女に言いたかったはずなのに、何故か何も言うことが出来ず、結局は分団長として、その場をなだめる役にまわった。そして彼女は家に帰ってしまった。

その日の帰り、僕たち分団メンバーは教頭先生に呼び出された。僕は朝

の出来事を叱られるのではないかと、内心ヒヤヒヤしていたが、話は穏やかに始まった。

「今朝のピアスの出来事、おおごとだったなあ。先生びっくりしたよ。きっと彼女ももつとびっくりしたんじゃないかな。あのなあ、例えば言葉が自分の気持ちを伝える手段として使えなかったこと、あるか？ちよつと難しいかな？周り全員が日本語を理解できない外国の人で、お腹が痛くて救急車呼んでほしいってなつても、伝えられない場合、お前たちどう思う？」

先生の優しい語りかけに、彼女と同じ一年生が手を挙げながら、「そんなのめっちゃ困るじゃん。俺、そんなところ行かないよ。まじ困るし。」

と大きな声で答えた。

「でも、おうちの都合で日本に来てるかもしれないぞ。ピアスもペルーでは赤ちゃんの時に生まれてすぐする文化があるらしいよ。菱介はどうだ？どう思う？」

今度は僕が聞かれた。でも僕は黙り込んでしまった。それを見た先生は最後に、

「気持ちを伝える方法がなかった彼女の気持ちを少し考えてみようか。まあ、明日は一方通行でも話しかけてみような。」

分団の仲間は妙に納得して帰宅した。

翌日、何もなかったようないつもの朝。彼女もいつも通りササッとやって来たが、耳にピアスはなかった。分団のみんなは一緒になって昨日のことを謝った。彼女はコクリとうなづくだけだった。その後も僕が卒業するまでの二年間、僕は一度も彼女の声を聞くことなく卒業した。何かもやもやしたまま。

僕はこの経験を通して、言葉が気持ちを伝える大切なツールであるということを実感した。そして、いつも自分たちが基本であると考えることは良くないと思った。違う国の文化や考え方も尊重しながら、自分たちの生活にその文化や考え方が入った時、どう折り合って共存していくか、否定をする前に考えられる自分になりたいと思った。とっかかりは面倒だなと思うかもしれない。でも、相手を思い、自分も歩み寄ること。当たり前のようにできる日本を目指して愛知県から発信出来るよう、僕も一役かえるよう努力したい。

来年は東京オリンピックもあるので、外国からの訪問者に日本を好きになつてもらつて、気持ちよく日本で過ごしてもらいたいと思う。

「違いを知ること」

ぼくは、自分たちと見た目や文化などが違っていたとしても、世界中のみんなと一緒に笑顔で生活できる社会になるとよいと思っています。ここ日本でも、ぼくたち日本人だけでなく、外国人の人たちも安心して暮らせるようになると思います。

このような考えをもったのは、ぼくが三年間ロンドンで暮らしていたからかもしれません。イギリスは多民族国家です。イギリス人やスコットランド人の他にも、アラブ系やインド系、中国系など、いろいろな文化をもつ人々が共に暮らしています。ぼくはダンスを習っていて、そこではたった一人の日本人でした。みんなは文化や人種など関係なく、ぼくに優しく接してくれました。いろいろな国の子と友達になって感じたことは、自分の考えを堂々と伝える人が多いということです。ぼくがおにぎりを食べていた時、

「その黒いの何？おいしいの？」

と何人かの子が集まってきました。ぼくがかんそうさせた海草だと説明すると、みんなはおどろいたり、なっとくしたりしていました。さらに、お互いの国の食べ物について話すと、国によって食べないものや、宗教によって食べてはいけないものがあることを知りました。これまでぼくは知らないことがあっても、わからないことが恥ずかしくて、なかなか聞くことができませんでした。でもこのことをきっかけに、違う国なんだから、知らないことがあたりまえだと思うようになりました。そして、違う文化を知ることの面白さを感じました。

ぼくは日本に戻り、新しい学校でもたくさんの方ができました。クラスには、フィリピンやポルトガル、ブラジルの子がいてとても嬉しかったです。しかしある日、外国籍の子を見た目でばかにしたり、変なあだ名を作って呼んだりしている場面を目にしました。その時ぼくは注意をしたのですが、残念ながら分かってもらえず、どうすることもできませんでした。このことがとても悲しく、怒れて、とても嫌な気持ちになりました。肌の色や宗教上の違いなどはあるのがあたりまえです。でもそれを知らないことで、とてもひどいことにつながってしまったのです。知らないことは恥ずかしいことでも悪いことでもありませんが、ときに差別や人を傷つけてしまう怖いものだと思います。違いを理解しようとする心が必要だと強く感じました。

最近、ぼくの楽しみのひとつは、先生に頼まれて、外国籍の子たちの通訳をすることです。うまく伝えることができる

「ありがとう」

と笑顔で返してくれて、とても嬉しい気持ちになります。ぼくが今できることはそんな小さなことしかありません。しかし、未来のために、世界のことをたくさん知ろうと努力し、自分の考えで、誰かのためにすすんで動いていきたいです。

「ダイバーシテイな愛知へ」

コンビニエンスストアへ行く度に思うことがある。それは接客してくれる店員が様々な国の出身者であること。しかもその割合が確実に増えていること。彼らが皆、驚くほど上手な日本語であの複雑な仕事を全て把握し、滞りなく対応している姿に感動する。と同時に

「自分は出来るか。」

と、考えてみる。異国へ渡り、第二外国語等で学ぶチャンスがある英語でさえない国の言葉で、お客様の要望に応える。想像するだけで冷や汗ものである。だから僕は彼らを尊敬しているし、応援している。そして自身将来どんな職業に就くか分からないけれど、色々な国の出身者と協力し合いながら働く姿を想像すると、ワクワクする。ただ一度、この話を友達にした時には理解を得られず、疑問に思った。何かおかしなことをいったらどうかとしばらく考えてみたが、それは、自分の幼少の頃の経験に係るのではないかと思った。

僕は幼少期をトロントで過ごした。多民族国家の象徴ともよばれるカナダでの生活に幼いながらも馴染んでいた。そして、日本出身である事をアピールし、日本のことをもつと色々教えてよ、と先生に満面の笑顔で言われた。International Day というイベントの日に、お稲荷やおにぎりを持参し、甚平を着て登園し、当時大好きだったウルトラマンのフィギュアを見せ、戦う時のポーズを真似て得意気にしている僕の写真は沢山残っている。そこにはインド、中国、ロシア、韓国等、様々な国から同じように現地へやってきたクラスメイトであふれていた。同様に自国の食事を紹介し、民族衣装をまとい、国歌を堂々と歌ってくれた。あそこにはいつも皆の笑顔があふれていたな、と鮮明に思い出される。まさにこの経験が先程の友人との感覚の違いだろうと思った。

「みんなちがって、みんないい。」

金子みすゞ氏の詩の一節。この精神が自然と自分の中にストーンと入り、それが根つこととなったのだと改めて思う。

カナダは皆違うことがあたり前でそれを尊重し合い、お互いをよく知り理解することの大切さを社会全体で体現していて、僕達日本人が学ぶことが沢山あると感じている。話す言葉、肌や瞳の色、宗教、生活習慣等、全てが違ったとしても、あなたはあなたに変わりはない。だからこそ、出会い、仲良くなることで新たな発見があり、その気づきが自分を、そして周

りにも少しずつ変化をもたらしてくれる。そうした変化が自分を人間として豊かにしてくれると思う。一人ひとりがその気づきを大事にすることで、また新たな連鎖を生み出し、この積み重ねにより、社会はまた一段と素晴らしいものへと成長すると信じている。

今後日本は超高齢化、超少子化が進む。もっと真剣に他民族を受け入れる体制作りを強化し、彼らが安心して生活し、学び、働き、日本で幸せな生活を送れるように具体的な対策を考え、取り組むことを、僕は今の大人達、そして政府や行政機関に望む。また、僕達は外国からの出稼ぎや移住を検討している人々に選ばれる国であり続けるような努力が必要だと思う。特にここ愛知県はものづくり産業や工業が非常に盛んな所で、働き手不足が深刻な問題となりつつある。それに伴い、人工知能<sup>AI</sup>が急速に発達しつつあるけれど、全ての企業が導入するには、それに要する時間と費用の面から考えても簡単にはいかないと思う。又、どんなに<sup>AI</sup>が発達したとしても、人間の勘、感覚的な発想や判断、融通さに勝るものはないと本気で思っている。

となれば、やはり人の力が絶対必要で、日本にその力が足りないのであれば、働き手となる世界各国の人々に来日し、働いてもらう。当然その代償に相応の賃金をきちんと支払うこと、日本での生活に慣れてもらう為に必要な支援や、その家族も望むのであれば呼び寄せられるようにすることは、当然、我々日本の役目だと思う。その仕組みが上手くいけば、日本は学びにも、働くにも、住みよい国となるだろう。人と人が強くつながる社会は、その各々の意識が明るく前向きに、そして変化や違いをありのまま受け入れられる寛容さが加わることで、大きな影響をあらゆる場面にもたらすだろう。多文化共生と言うのは簡単だけれど、うまくやっていくには時間がかかるに違いない。それでも皆が意識を少しずつ変え続けることで、小さな波が大きな波へとなり得ることを、努力を止めなければ起こり得ることを忘れてはいけないと思う。

僕達の明るく豊かな未来は、一人ひとりの心がけと、お互いを知り、学ぼうとする勇氣にかかっていると信じている。これからも強くたくましく、共に生きる仲間を大事にし、密にコミュニケーションをとりながらやっていけるのかにかかっているのだぞ、と常に頭と心に留めて生きていきたいと強く思う。

「外国人と日本人の違いから見る多文化共生」

私は日本人と外国人の違いはといわれて、まっ先に思いつくことは言葉です。そして、それ以外の違いは外国人だからではないと思います。私は外国人と日本人の違いを考えてみました。

家には私が小さいころから、たくさんの外国人が来ていました。ホームステイの受け入れをしていたからです。一番初めは、モンゴル人の大学生でした。日本の大学に通っていて、日本語も話せて、顔も日本人に似ていました。まだ、幼稚園に通っていた私をとっても可愛がってくれたのを覚えています。

私の家に来てくれた人たちは日本語を話せる人が多かったです。中には日本語が全く話せない人もいました。私は英語が話せません。そして、両親も英語が話せません。けれど、なんとなく一緒に生活ができるので私は不思議だな、と思いました。今までうちには中国、台湾、タイ、モンゴル、ベルギー、ドイツ、アメリカ、カナダ、ニュージーランドの人たちが来てくれました。みんな、とても優しい人達でした。

ドイツの男の子は、ご飯にチョコレートをかけて食べていました。甘いものばかり食べていましたが、ドイツの人がみんなそうではありません。その男の子は好き嫌が多くて甘い物が大好きでした。好き嫌いは多いけど、ボールやゲームで遊んでくれるとても優しいお兄ちゃんでした。色々な日本人が、ドイツ人はソーセイジばかり食べているの？と聞いたら彼は、違う！と言っていました。国によって色々な印象があると思います。私はあまりそういうことを知らなかったけど、印象は違うこともあるのだな、と思いました。

ベルギーから来た女の子は、よくしゃべる子で、日本語もとても早く上達しました。彼女は両親が中国人なので、見た目は日本人とあまり変わりません。私のお母さんは彼女のことを、やさしくて、思いやりのある良い子だ、と言っていました。私もそうだな、と思いました。言葉は通じるけど、うまく気持ち伝わらないことが同じ国どうしの人でもあります。でも、言葉が通じなくても、私の気持ちを彼女はよく分かってくれたような気がします。気持ちに通じることに、言葉や国は関係ないと思います。

私は、外国の人は自分の意見をはっきり言える人が多いと思います。やりたくないことは、やりたくない、好きじゃなかったら、好きじゃない、と言えます。逆に、ホームステイに来ていた人たちはよく、日本人は思っ

ていることをはっきり言わないと言っていました。例えば、自分が思っていることじゃなくても、それに合わせて話すなどです。外国の人たちはなぜ、思っていないことを話すのか分からないと、言っていました。自分の思っていることをストレートに言わないことは、日本人の優しさだと思います。けれど、はっきり言った方が、良い時もあるのかもしれないと思いました。

そして、私が考えた日本人と外国人の違いの中に、お風呂とシャワーがあります。外国の人はお風呂に入る人が少ないです。そして夜ではなく、朝シャワーを浴びる人が多いです。

私は、日本人と外国人の違いについて考えてみましたが、言葉の違いは、どちらかがその国の言葉を勉強すれば大丈夫だと思うし。性格や習慣は、同じ日本人、国の人でも違うことが多いと思います。日本人でも細かい人や大雑把な人がいます。外国人でも同じです。人と話すのが好きな人もいれば苦手な人もいます。そして、それは外国人でも同じです。うちに来た人ではないですが、日本に一年間いたのに、日本語を全く喋らずに帰って行った人もいました。

私も一度、十日間アメリカのロサンゼルスにホームステイをしに行きました。アメリカは、ピザやお肉をたくさん食べる国だと思っていました。でも、毎晩ご飯はみかんの皮が入ったお米でした。他の家にとまった子たちは、ピザやパン、お肉を食べたと言っていたので、やっぱり家庭によってちがうのかな、と思いました。

日本人だから、〇〇とか、外国人だから〇〇ではなく、その人それぞれ個性だと思います。だから、多文化共生というのは、外国人ということを意識するのではなく、その人それぞれの個性を尊重すれば、そんなに難しいことではないのかなと思います。そして、それは多文化共生だけではなく、私たちの普段の学校生活や、家での生活にも当てはまることじゃないのかな、と思いました。これからはそれぞれの個性を尊重して、いろんな物事について考えて、行動して、行きたいです。

「自分なりで大丈夫」

「大丈夫かな。」

私は、外食先で外国人を見ると、ついつい気になってしまう。旅行先で現地の食べ物に挑戦するのは、大きな楽しみであると同時に、不安もある。味はもちろんのこと、食べ方やマナーなど、分からないことが多いからだ。せっかくなので、正しく、美味しく現地のやり方で食べたいと思う。海外に行くとき、最近は、日本語メニューも多く置いてあるし、何より現地の人々が前向きにいろいろな教えてくれるので、ありがたい。恥ずかしがり屋で控えめな日本人とは違う。

六月に東京へ修学旅行に行ったとき、多くの外国人に出会った。ラーメン屋や寿司屋など、英語メニューを片手にあれこれ吟味する彼らの姿を何度も目にした。「大丈夫かな。」と、ゴールデンウィークに家族で行った代官山のそば屋での出来事を思い出した。

それは、住宅街の中にぼつんとある、有名なそば屋だった。看板もなく、メニューもそばだけ。長い列に並んでいると、外国人の夫婦がやってきた。何やら、二人で相談している。「大丈夫かな。」とやはり気になる私。母も二人の方を見ていた。そして、驚くことに、母は二人に英語で声をかけた。外国人の夫婦は、

「Thank you.」

と笑顔でお礼を言うと、列の最後に並んだ。母は英語が話せる。周りの人の注目が少し恥ずかしかったが、人助けをした母が誇らしかった。

先日、母と高山に旅行したときもそば屋に寄った。小さいお店だったが、中に入るとだしのいい匂いがした。体格のいいおばさんが忙しそうにしていた。

「ワサビ、リトルね、リトル。」

「メイク、スープ、アフターそば、イート。」

「ルック、ルックよ。これ見てね。」

と言いながら、何か紙を見せていた。私の席にもその紙があった。それには、英語でそばの食べ方が絵と共に丁寧に書いてある。母が、

「私たち以外、お客さん、皆、外国人だね。」と言った。

不思議な感じがした。日本食代表のそば屋なのに、外国人だらけ。店内は静かだった。外国人は、そばをすすらない。すすめることは、マナー違反だからだ。私がそばをすすると音が響いてちよつと恥ずかしかった。

ホームなのにアウェイ。食べ方もみんな様々。つゆに浸さず、そばだけ食べている子供。箸がうまく使えなくて、フォークをもらっているお姉さん。天ぷらとビールだけだったのでいるお父さん。間違いだらけでも、みんな楽しそうに、写真を撮りながらそばを味わっていた。私は、珍しく、「大丈夫かな。」と気にならなかった。私の前に運ばれてきたそばもいつもよりおいしく感じた。心地よい、食事の時間だった。

全部、おばさんのおかげだった。英語は流暢ではないし、何度も聞き返したりしていたが、身振り手振りで通じていた。日本を楽しんでもらおうとする一生懸命なおばさんが、日本人として誇らしかった。母のように英語が話せなくても、やれることはあるのだと、気持ち明るくなった。

私は、大学生になったら東京に行きたい。そして、アルバイトをしようと思っっている。お店は、絶対日本食屋がいいと思う。外国人がたくさん来るお店がいい。そして、母やそば屋のおばさんのように、外国人が心から楽しんで食事し、いい思い出をつくってもらえるように、私なりの力で貢献できたらと思う。美味しい食事と楽しい思い出は、きつとずっと心に残るはずだから。

先日、母のアメリカ人の友達がうちに食事をしに来てくれた。日本に来て二年で、日本の家庭の味を知らないらしい。母は、筑前煮を用意していたが、茶色で、アメリカ人に馴染みの少ない食材も多く、なかなか彼女はそれに箸を付けようとはしなかった。母の得意料理を食べてほしくて、勇気を出して、

「ヤミー。トライ、プリーズ。」

と言い、食べやすそうなレンコンを差し出してみた。笑顔を忘れない。そば屋のおばさんの真似だ。

「Sure!」

と乗りよく、返事をした彼女は、ぱくりとレンコンを食べてくれた。もつとレンコンについて説明したりしたかったが、まだまだ英語力がついていない。しかも、レンコンって英語で何て言うのだろうか。まだまだ課題も多い、私なりの異文化交流。でも、みんな楽しんでいひと時を過ごせたことは、とてもいい思い出となり、これから、自分なりに大丈夫と私の背中を押し続けてくれることだろう。

「多文化共生は「リスペクト」することから」

多文化共生、それは国籍や民族の異なる人々が、互いを認め、対等な関係を築こうとしながら共に生きること。

僕は、父の仕事の関係で、五歳からカナダで四年間、アメリカで二年を過ごした。そして一年半前に、この豊橋に帰って来た。最初の地カナダが、一体どこにあって、どんな言語で話さなければならぬのかの知らず、英語の辞書や大量の会話集などを持って引越しをした。

カナダに入国してからすぐの四月から、学校に通い始めたが、そこには言語と文化の違いがあった。言いたいことが伝わらずにとても苦しんだ。カナダは学年末が六月の終わりなので、数ヶ月で学校が終わってしまい、結局僕は、その間で親しい友達ができずにいた。

やがて二ヶ月半の夏休みが終わり、九月から新しい学年に進級した。夏休み前とは全く新しい顔ぶれの同級生に見えた。カナダは、移民受け入れに積極的だったので、他国からやって来た子ども少なくはなかったが、彼らは僕よりもだいたいぶ流ちように英語を話していた。またもや孤独を感じ、気付けば授業中、ひたすら涙を流して声を上げずに泣いていた。すぐに担任の先生が、理由を聞いてくれようとしたが、ただ泣くばかりなので、母が学校に呼ばれ、ようやく僕のさびしさと不安を伝えることができた。

それから先生は僕の目線に降りて、ていねいに接してくれるようになった。そのおかげで、僕はみんなに心を開くようになった。日本通の両親を持つ子もいて、そういう子から僕に興味をもってくれるようになった。はりつめた緊張がゆるんだら、少しずつ会話ができるようになり、残りの年月は、友達として好意を示してくれる子が増えた。

初めのころ僕は、どちらかという人と人に歩み寄ってもらい、僕を受け入れてもらう形で人と親しくなっていたように思う。しかしだんだんと、自分からも相手を理解して歩み寄るようになっていったと思う。

カナダは移民の国と呼ばれる程なので、様々な文化があり、それぞれ尊重するのが普通だ。そして、多文化の中で、お互いが協力しあう生活が大それた事だと学ぶことができた。

アメリカは、カナダとは大きな文化の違いは少なく、わりと簡単に転校できた。ここでは、日本人が少しいて、ちよつとした悩み事を日本語で相談することができ、安心できた。僕のカタコトの日本語の使い間違いを、やさしく教えてくれて、助かった。だから、日本人の同じ年ごろの子にも

興味をもてた。

アメリカもカナダも一貫して厳しい教育がある。それは、はしたない言葉、人を傷つけたたり、軽んじたり、命をおびやかす言葉を校内で発すると、担任や校長先生の部屋に呼ばれ、律するよう指導されたり、最も重きは退学もありえるのだ。

帰国して僕は時々、海外に居たことをひやかされたり、傷つけられる言葉をかけられたりすることもあったが、はっきりと「やめてほしい」と伝えることができた。それは、カナダやアメリカで、人を傷つける言動を行う人より、そのこと自体が悪だと教えられたからだ。言語が何であれ、傷つくということに国境はない。だから、はっきりと自信をもって伝えることが、その子のためであると思った。

僕は、日本も少しづつ異文化を受け入れつつあると思う。その証拠に、帰国して、異文化に興味を持った子がたくさん助けてくれたおかげで、僕は一年目を乗り越えることができた。それでも、少数派の文化は、受け入れが難しいと思う。世界の文化を取り入れることにより、それらの国の言語を習得できるのも夢ではない。勉強でもスポーツでも何でもいい、その国ならではのことに興味をもち、そのことを通して得る言葉の習得はとても早いと聞いたことがある。

僕は幸いにも幼いころに英語圏に住んだだけでなく、多文化と接することができた。同時に、それらの国が、僕を「日本の文化」として受け入れてくれた。そして、人間としてとても大切なコミュニケーションの手段として、多言語に親しみ、人との理解を深めることが多文化共生につながるのだと思うようになった。

どの国にいても、相手を尊重する気持ちが大切だと思うが、それでも異文化間で、同じ様な考えや行動をもてるとは限らない。それが原因で、人種差別や宗教の否定がおこったり、良くない行動をおこす人々もいたりする。だから、その良し悪しを見分ける感覚を磨く必要がある。

最後に、いろいろな異文化との共生で一番大切なことは、文化の違いを少しづつでもいいから、受け入れるように努めること、僕がカナダ、アメリカ、日本での助けに恵まれたように、相手を「リスペクト」尊重することが何よりだと思う。そして、自分の経験を活かして、戦いのない、平和な世の中を作る助けができればいいと思う。